令和４・６・30

むつみ

２８７

日本国語教師の会「欅の会」

第五十七回　日本国語教師の会「欅の会」
千葉ＷＥＢ大会　案内号

長引くコロナ禍のもとで、新しい生活様式、オンライン授業を盛り込んだ学校生活が営まれています。その中で、新たな課題と向き合いながら「これからの学校教育をどのように展開していくか」の模索が続いています。

そんな状況の中で本会では、これまでと変わらず国語教育で大事にしたいことと、それに縛られずに、積極的に変えていかなければならないことを、さまざまな実践を重ねながら探ってまいりました。その実践を交流することで、子どもたちの深い学びを追求しています。母体である「日本国語教師の会「欅の会」は、月例会が七月で五一八回となり、学び合いを続けています。

本大会は、今年も参加者の安全安心を確保するために、昨年に続きオンライン開催といたします。千葉県の先生方をはじめ多くの方々にご参加いただき、熱い議論を交わしたいと願っております。皆様のご参加を心よりお待ちしています。

一　主題　ことばを育て人間を育てる
　　―国語教育の継承と創造―

主催　日本国語教師の会「欅の会」

二　とき　二〇二二（令和四）年八月六日（土）
　　九：五〇～一六：〇〇

三　ところ　Zoomによるオンライン開催
　　（千葉大学教育学部附属小学校から配信）

四　日程

【午前の部】八月六日（土）　九：五〇～一二：一〇

１　入室準備　九：三〇～九：五〇

２　開会式　九：五〇～一〇：〇〇

①　開会のことば　司会　石井　桃子（千葉）

②　大会運営の連絡　大会事務局　若林　富男（東京）
　　大会事務局　青木　大和（千葉）

3　はじめの話　一〇：一〇～一〇：二〇
大会委員長　大木　圭（千葉）

4　入室準備　一〇：二〇～一〇：三〇

5　実践報告分科会　一〇：三〇～一二：一〇

◆下学年分科会　司会　宇山　美紀（千葉）
発表者　小笠　晃司（千葉）
廣瀬　修也（東京）
特別発言者　黒田　英津子（静岡）

◆上学年分科会　司会　石井　桃子（千葉）
発表者　飯塚　健太（埼玉）
時田　裕（千葉）
特別発言者　片山　守道（東京）

6　昼食　一二：一〇～一三：一〇

【午後の部】　一三：一〇～一六：〇〇
司会　宮本　美弥子（千葉）

1　入室準備　一二：四〇～一三：一〇

2　ゲストの話（記念講演）　一三：一〇～一四：三〇
山本　慎一氏（前岩波ジュニア新書編集長）
◇講師紹介　楠瀬　千夏（千葉）

3　先達の話　一四：四〇～一五：一〇
工川　洋　氏
◇講師紹介　大木　圭（千葉）

4　まとめの話（総括講演）　一五：二〇～一五：五〇
成田　信子（神奈川）

5　閉会式　一五：五〇～一六：〇〇
・会代表挨拶　秋山　誠（東京）
・参加者代表挨拶　佐藤　博（岩手）
・大会連絡　若林　富男（東京）

五　参加費等　大会参加費は無料　＊大会申込は必要
大会冊子が必要な方は二〇〇〇円（資料代・送料）を、次のゆうちょ口座に振り込んでください。
【口座名義】欅の会（ケヤキノカイ）
○ゆうちょ口座から振り込む場合
【郵便貯金口座】（記号）10140　（番号）48512461
○ゆうちょ口座以外の銀行等から振り込む場合

【銀行名】ゆうちょ銀行【店名】〇一八（読みゼロイチハチ）【店番】018【預金種目】普通口座【口座番号】4851246

六　**申込方法**　七月三十一日（日）までに、左記のＵＲＬ（こくちーず）からお申し込みください。

七　**申込先**　こくちーず

https://www.kokuchpro.com/event/keyaki_chiba/

八　実践報告等

実践報告分科会では、小学校下学年分科会と上学年分科会を予定しています。それぞれ二名（提案十五分、質疑応答まとめ三十分）です。実践報告の発表をご希望される方は、五月三十一日（火）までにテーマや発表概要を明記してお申し出ください。

原則として受付順に決定します。大会事務局より依頼することもあります。発表要項は、Ａ４判用紙を縦長、縦書き、二段組にして二枚以内にまとめ、七月二十日（火）までに、千葉大学教育学部附属小学校青木宛

〈y-aoki@chiba-u.jp〉に、電子データでご送付ください。

九　**大会情報等**

日本国語教師の会「欅の会」や千葉大会の情報は本会のＨＰをご覧ください。https://www.keyakikokugo.com

【大会役員】

大会委員長	大木　圭	（山武市立日向小学校）
大会事務局長	青木　大和	（千葉大学教育学部附属小学校）
大会事務局	宮本美弥子	（千葉大学教育学部附属小学校）
	小笠　晃司	（千葉大学教育学部附属小学校）
	長尾　裕一	（千葉大学教育学部附属小学校）
	石井　桃子	（千葉市立高浜海浜小学校）
	片山　守道	（お茶の水女子大学附属小学校）
	廣瀬　修也	（お茶の水女子大学附属小学校）
	横内　智子	（前・お茶の水女子大学附属小学校）
	若林　富男	（前・江戸川学園取手小学校）

◇◇　会案内その１　◇◇

日本国語教師の会「欅の会」の研究でめざすもの

日本国語教師の会「欅の会」は、二十一世紀の国語学習の在り方の探求する研究集団である。

子どもたちが「自ら国語の力を獲得する学び」の姿を求めて、東京、千葉、埼玉、神奈川、茨城から会員が都内の会場校に集まって来る。若手から中堅、そしてベテランまで、幅広い層の教員が、常に三十名近く参加する。

『研究は厳しく、人間関係は和やかに』を合言葉に毎月一度集まり、互いに学び合っている。二〇二二年七月には月例会が五一八回となり、五〇年以上も続いている。

【提言】

大木　圭（千葉・山武市立日向小学校）

解決のカギはエンパシー

一　はじめに

「差別はいけません。人はみな〇〇〇人間なのですから」

さて、この〇〇〇に、迷うことなく「おなじ」という三文字を入れた方であれば、しばらく本稿にお付き合いいただきたい。どうやら日本の教育は、長いことこうした教育を重ねてきたように思う。一方で、インターナショナル校の場合は、「ちがう」が一般的らしい。ＳＮＳで流れてきた情報だから、本当かどうかは疑わしい。ただ、少し考えさせられた。

二　教育問題は多種多様に

一介の授業者として生きていくはずだった私が、流されるまま、指導行政や管理職の任についてもう十三年目になる。当然、国語教育のことばかりに明け暮れているわけにもいかない。だいたい国語教育をかじってきたような人間が管理職になろうものなら、たいてい「あの人は、大造じいさんの気持ちは分かっても、教職員の気持ちは分かってない」などと陰口を叩かれるものと、昔から相場が決まっている。私の場合は、大造じいさんの気持ちも分からないが…。閑話休題。

管理職選考試験なるものを受験するにあたって、それまでほとんど関心がなかった特別支援教育や人権教育、教員の不祥事等に係る教育法規等と真正面から向き合わざるを得なくなった。ただ、改めてそれらを一から勉強し直してみると、当然のことだが、どれも奥が深い。管理職の立場で、実際に児童や保護者、職員を相手にするようになると、いよいよその奥深さを思い知る。さらには、現在勤務している学校のように、人口減少にあえぐ田舎の小学校に赴任してみると、まったく日本語が話せない外国人児童が、次々に転校してくる現実に直面する。タミル語やシンハラ語なんて、その存在すら知らなかった。外国人児童の日本語指導については、本校だけでなく、今後さらに大きな教育問題の一つになるだろう。

事程左様に、今の教育問題は多岐にわたっており、深刻さを増している。さらに日々の忙しさに追われる中、どこから手をつけたらよいかさえ見当もつかないように見える。

しかし最近、これらの問題の多くは、一見全く別物のように見えて、実は同根なのではないかと思うようになってきた。

三　人間はみな「ちがう」という事実を出発点にしてみる

たとえば、ＬＧＢＴについて語る時、あるいは外国人児童生徒について語る時、または特別支援教育について語る時、まだあまり理解していない段階では、たいてい、それに該当するかしないかの線引きをしながら語っていることが多い。

ただ、こうした問題について知れば知るほど、どれもそう単純に線を引けるようなものではないことに気づく。最近では、ＬＧＢＴに加えてＱ「クエスチョニング」という「性自認や性的志向が決まっていない」というセクシュアリティもある。外国人児童の問題も、外国籍か日本国籍かといった単純なものではなく、日本で育って日本語しか話せないのに、見た目だけで外国語で話しかけられるといった問題も起こっていることから、外国にルーツを持つ児童といった表現もある。特別支援教育についても、まるで当事者ではないようなふりをして、実は大人だって聴覚優位というよりは視覚優位の方だなどと自覚していたりする。すなわち、どの問題も、勝ち組・負け組などとキレイに二つに分かれるような線などなく、人間はみな「ちがう」という、当たり前の答えに行き着く。

四　シンパシーではなく、エンパシーを

目の前の人が、タンスの角に足の小指をぶつけるのを見たら、「痛かっただろう」と同情してしまう。この自然に沸き起こってくるような感情のことを、英語でシンパシーといい、同情などと訳される。これに似た言葉で、エンパシーという言葉がある。これも共感などと訳されることが多いが、いわゆる「ぼくイエ」本で有名なブレイディみかこさんによれば、「別にかわいそうだとも思わない相手や、必ずしも同じ意見や考えを持っていない相手に対して、その人の立場だったらどうだろうと想像してみる知的作業」と定義される。

すなわち、シンパシーは他者を自分と同一視して自然に生まれる感情であるのに対し、エンパシーは、自分と他者は異なる存在であることを認めた上で、相手の立場を慮ったからこそ生まれる感情という点が異なるともいえる。

もしも、私たちがこのエンパシーという知的作業を意識し、実践するようになれば、あれほど多種多様に見えた多くの教育問題の、解決への糸口が見えてくるように思えてならない。

何度も注意したのに、Ａさんはまた友達の頭を殴った。その事実に、教師として、親として、まず一言、何という言葉をかけるか。「あんなに言ったのに、なんでまた殴ったの！」という言葉をぶつけるようなら、エンパシーは働いていない。むしろ、あれだけ注意したのだから、分かっているはず…などと自身とＡさんを無意識に同一視しているために期待が生じ、それを裏切られたという感情が生まれたに過ぎない。

そうではなく、「Ａさんに、何かあったのではないか」と想像し、まず一言「何があったの？」と優しく尋ねれば、Ａさんは「〇〇君が、悪口を言ってきたんだ…」という言い分を落ち着いて言えるだろうし、「そう、それは悔しかったね。でも、殴るという方法は正しかった？」と諭すことで、Ａさんは、反省するとともに自分自身が大切に扱われていることも実感できるかもしれない。いじめやそれに係る指導法の問題も、エンパシーを働かせてさえいれば…と思うことは多い。

五　機を捉えてエンパシーを育てよう

「欅の会」のモットーである「吾以外皆我師」の精神は、他者へのリスペクトを象徴する言葉でもある。一方で、若者の間では「ディスる」という語がごく普通に使われているが、あれはディス・リスペクトの略語であり、リスペクトの反意語である。こんな言葉が無自覚に、面白おかしく使われるようになってしまった今の世の中だからこそ、学校教育では、①他者を自分とは異なる存在として認識・尊重し、②エンパシーという知的作業をこそ大切にするべきなのではないか。

考えてみれば、国語科の学習指導要領にも「…一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと（読むこと・中学年）」などは、すでに指導事項として示されている。また、「書こうとしたことが明確になっているか、文章に対する感想や意見を伝え合う…（書くこと・中学年）」などのように、友達と意見を伝え合う場面では、書き手の意図を尊重することが求められている。にもかかわらず、実際の授業では、いわゆる「できる子」が、以心伝心よろしく教師の意をくんで「こうするといいよ」などと、友達の文章を「添削」する。またそんな姿を「学び合い」などと称する場面にも出くわす。ちなみに、以心伝心は、英語でテレパシーと訳される。もはや超能力の域である。授業においては、子どもが教師の意をくまなければならないようなテレパシーではなく、文章やその書き手の意図や思いに寄り添えるエンパシーを育てたい。

◇◇　会案内その2　◇◇

日本国語教師の会「欅の会」は、故石田佐久馬代表の遺志を引き継ぎ**「吾以外皆我師」**をモットーに学び続けている。月例会で学んだことをもとに、日本国語教師の会「欅の会」の全国大会(毎年七～八月)で、発表する会員も多い。

近年三年間の日本国語教師の会「欅の会」の全国大会の研究テーマを掲げると、次のようになる。

二〇一八年　第五十四回宇都宮大会（栃木県宇都宮市）
ことばを育て人間を育てる
～学び続ける主体を育てる国語の教室～

二〇一九年　第五十五回横須賀大会（神奈川県横須賀市）
ことばを育て人間を育てる
～主体的・対話的に学びを深める国語の教室～

二〇二一年　第五十六回東京WEB大会（東京都文京区）
ことばを育て人間を育てる
～これから先の国語の教室を考える～

日本国語教師の会「欅の会」の会員は、全国大会のテーマを常に意識しながら、自分で興味関心のあるテーマを設定し、授業実践を通して追求し、年一回月例会で提案することを申し合わせている。

＊本会では広く会員を募集しています。入会金は無料です。

なお一昨年（二〇二〇年）延期していた陸前高田復幸大会は、来年二〇二三（令和５）年八月に、現地で開催する予定です。